慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	活動報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2008
Jtitle	Newsletter Vol.3, (2008. 3) ,p.6- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000003-0006

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

活動報告

開催日	研究・運営プログラム名	会議等の名称
1月11日	全体	Logic of Shadow（影の論理）
1月15日	哲学・文化人類学班	Roberto Casati 講演会
1月19日	全体	理屈？屁理屈？理屈ぬき？―考える心、感じる心―
1月23日	哲学・文化人類学班	べてるの家で：ディスアビリティと映像人類学
2月4日	論理・情報班	Pierre Chiron 教授講演会：アリストテレス弁論術の最新研究について
2月8日	倫理委員会	第1回研究倫理セミナー
2月9-11日	全体	Rational Animals, Irrational Humans
2月12-13日	論理・情報班	Jean-Yves Girard 教授連続講演会
2月23日	研究発信支援プログラム	英文論文執筆推進のための連続講習会④：小嶋祥三
2月26日	言語と認知班	言語学コロキアム共催ワークショップ　Language and cognitive processes: neurophysiological, developmental, and crosslinguistic perspectives
2月28日	言語と認知班	玉川大学脳科学研究所若手の会談話会第8回
2月28日	研究発信支援プログラム	英文論文執筆推進のための連続講習会⑤：小嶋祥三
2月29日	哲学・文化人類学班	「アフリカ（旧ザイール）における憑依儀礼とアフリカ的＜Person＞：感情と象徴思考の動態」―異常をめぐる論理と感性の人類学と精神医学諸学派の展開（1）―
3月1日	哲学・文化人類学班	宗教と医療にみる狂気の文化的解釈
3月1日	研究発信支援プログラム	fMRI 講習会①：宮内 哲
3月3日	論理・情報班	金南斗教授（ソウル大学）セミナー：西洋古代の哲学と弁論術
3月3日	研究発信支援プログラム	脳の講習会①脳の基礎知識：小嶋祥三
3月5日	研究発信支援プログラム	脳の講習会②自己と脳：小嶋祥三
3月6日	哲学・文化人類学班	On good terms with the world: virtue, reason, and reality
3月8日	研究発信支援プログラム	fMRI 講習会②：宮内 哲
3月10日	研究発信支援プログラム	脳の講習会③行為と脳1：泰羅雅登
3月12日	研究発信支援プログラム	脳の講習会④行為と脳2：泰羅雅登
3月15日	研究発信支援プログラム	fMRI 講習会③：泰羅雅登
3月17日	研究発信支援プログラム	脳の講習会⑤脳の統合機能1：小嶋祥三
3月19日	研究発信支援プログラム	脳の講習会⑥脳の統合機能2：小嶋祥三
3月21日	言語と認知班	意味論研究会④：Chung-Chien Shan
3月24日	研究発信支援プログラム	脳の講習会⑦情動と脳1：中村克樹
3月24日	発達と遺伝班	Keio Global COE program Symposium Biology of reading: Brain science and behavioral genetic perspective
3月26日	研究発信支援プログラム	脳の講習会⑧情動と脳2：中村克樹
3月27日	言語と認知班	意味論研究会⑤：Mats Rooth

第1回全体シンポジウム "Logic of Shadow（影の論理）"（1月11日開催）

2008年1月11日北館ホールにて、「影の論理（Logic of Shadow）」と題し、シンポジウムを開催した。発端は、フランス国立科学センターの主任研究員であるロベルト・カザーティ氏を招聘したことによる。同氏は、陰影に関し、哲学、認知心理学、および美術史など学際的な観点から多くの著作を発表しており、ネット上でも陰影プロジェクトを展開している著名な研究者である。

シンポジウムは、オーガナイザーの一人でもある本塾渡辺茂教授の呼びかけに賛同して、陰影に関わる複数分野の研究者が集まり、極めて学際的な議論の場となった。前半は、千葉大学小山慎一助教が認知心理学の立場から、後頭葉腹側部損傷患者に生じた陰影認知の障害を人間の相貌認識の実験によって明らかにする発表、および京都大学霊長類研究所友永雅己准教授が霊長学の立場から、描かれた陰影をチンパンジーがどのように認識するのかを実験した比較発達学の成果を発表した。後半は、ルネサンス美術の専門である遠山と、本塾内藤正人准教授の共同発表として、陰影が西洋で初めて組織的に描かれるようになるイタリア・ルネサンスと、その後の遠い余波として我が国の江戸時代の陰影表現を比較する試みが成された。最後にカザーティ氏による発表が行われ、イタリア14－15世紀絵画における陰影を、模倣の観点および観者の許容度の視点から論じられたが、氏は認知と美術史、つまり見ることと描くことの間にある齟齬について、臨機応変、かつ縦横に語られ、この学際的なシンポジウムを総合する役割を見事に演じられた。学際的な発表における専門用語の違いなどの困難も予想されたが、活発な質疑応答も含め、陰影という人間の感覚にとって極めて本質的な事象と、その歴史的文化的意味についてのシンポジウムをすべて英語でもって滞りなく終えることが出来た。

（遠山公一）

Jean-Yves Girard 教授連続講演会（2月12-13日開催）

2008年2月12-13日東館6階G-Sec Labホールにて、Jean-Yves Girard教授（IML, CNRS, マルセイユ大学）による連続講演会が開かれました。第1回講演（"The Phantom of Transparency"）では、論理学におけるシンタクスとセマンティクスの二元論をめぐって、哲学的、批判的考察が展開されました。第2回講演（"The Geometry of Interaction"）では、前日の哲学的議論をさらに発展させるかたちで、論理学及び数学の技術的文脈に即して専門的講義が行われました。

また、12、13両日とも、Girard教授講演に引き続き、「Crossroads of Proof Theory, Computer Science and History of Mathematics」と題された、論理学、計算機科学、数学史に関する学際集会がOpen Research Center for Logic and Formal Ontologyにより開催され、Karine Chemla教授（CNRS）、楠葉隆徳教授（大阪経済大学人間科学部・人間科学科）、Pierre-Louis Curien教授（パリ大学第7校情報科学研究所所長）、小林直樹教授（東北大学・大学院情報科学研究科）、本センター特別研究教員の小川芳範が講演を行い、Girard教授を交えて活発な議論を交わしました。

（竹村 亮）

Pierre Chiron 教授講演会「アリストテレス弁論術の最新研究について」（2月4日開催）

西洋古代の政治・社会において「言論の技術」は、思考や情報伝達に大きな役割を果たしていた。それを「弁論術」とし「論理学」から峻別して批判を加えたのがプラトンであり、弟子アリストテレスも基本的に同様の枠組みにおいて「弁論術」を検討した。フランスやイタリアなどヨーロッパ諸国では弁論術（レトリック）の歴史研究には長い蓄積があり、文化において依然重要な位置を占めている。他方で、近代に欧米の学問システムを導入した日本の大学では、「弁論術」が学科からはずれたため、著しく研究が遅れてきた。

今回ご講演いただいたパリ第12大学のピエール・シロン教授は、これまで西洋古代弁論術の主要著作を校訂・翻訳してこられた第一人者で、昨年出版されたアリストテレス『弁論術』の仏訳（GF Flammarion 版）について、ご経験を踏まえた講演をいただいた。講演と議論をつうじて、偽アリストテレス『アレクサンドロス宛弁論術』（シロン教授がビュデ版で校訂）に代表される「アリストテレス以前弁論術」との比較対照で、アリストテレス理論の革新性が検討され、それが今日までの西洋弁論術の伝統を形成したことが示された。

講演に先立って、東京大学大学院で西洋古代弁論術を研究しておられる堀尾耕一氏よりシロン教授の業績について詳細な紹介をいただいた。また、講演会には、広く弁論術に関心のある多分野の研究者にご参加をいただいた。日本での弁論術の研究は諸外国と比べて立ち遅れているが、論理と感性の諸問題をより広い理論的・歴史的枠組みで捉えるための鍵となることが期待される。論理･情報班では、今後も積極的に弁論術研究を進めていく予定である。　（納富信留）

グローバル COE・言語学コロキアム共催ワークショップ “Language and cognitive processes: neurophysiological, developmental, and crosslinguistic perspectives”（2月26日開催）

認知・言語班では、2月26日に三田キャンパス東館4階セミナー室でイギリスのバーミンガム大学の喜多壮太郎さん、ウェールズ大学の Guillaume Thierry さんのお二方を講師にお迎えしてワークショップを行った。喜多さんの講演は “Spontaneous speech-accompanying gesture as a window into ‘thinking-for-speaking’: Insights from cross-linguistic and developmental studies” というタイトルで、発話にともなうジェスチャーと発話がどのような関係にあるかを検討するため、英語、トルコ語、日本語話者にモノの空間移動の動きについてスピーチを生成してもらい、そこで発話に伴うジェスチャーと発話の関係を分析した研究が紹介された。移動の動作を言語表現する際、英語は “roll down the hill” のように一つの動詞句の中に様態と動きの軌跡を同時に盛り込むのに対し、日本語、トルコ語では「転がりながら落ちる」のように様態と動きが二つの句にまたがって表現される傾向にある。その際のジェスチャーは発話の形式と一致し、英語話者は様態のジェスチャーと軌跡のジェスチャーを同時に盛り込むのに対し、日本語やトルコ語の話者は様態と軌跡を別々に表現する傾向が強い。しかし、それは話者の母語に固定的な傾向ではなく、英語話者でも発話が様態と移動を別の句に分けて表現するような状況では、ジェスチャーも日本語話者、トルコ語話者のように二つの要素を系列的に行うというデータが示され、ジェスチャーが言語表現のシンクロした心的表象の鏡のような機能を果たすという興味深い知見が発表された。Thierry さんの講演では “Unconsicous lexical semantic access in bilinguals” という題で、中国語を母語とし、英語を第二言語とするのバイリンガルの話者の無意識の言語処理において、母語である中国語が無意識にアクセスされることをＥＲＰを用いて鮮やかに示した研究が紹介された。この実験では中英のバイリンガル被験者に英語の単語ペアを提示し、二つの単語が意味的に関連しているかどうかを判断してもらった。その際、意味的には無関係の単語ペアで、母語の中国語で形態素（漢字）が共有されている場合と形態素の共有がないペアを比べると、行動的には二つの条件の間に反応時間やエラー率にまったく差が見られなかったが、ＥＲＰではより強いＮ４００の反応が得られた。つまり行動には表出されない非常に微妙な、無意識のレキシカルプロセスをＥＲＰが検出できることを示した研究で、その実験手法の鮮やかさと論理の緻密さに魅了された。

年度末の忙しい時期であるにもかかわらず、東館セミナー室が満員で椅子が足りなくなるほどの盛会で、2時間半の講演時間が終了した後も予定時間を過ぎても多くの聴衆が会場に残り、活発な意見を講演者と交わしていた。　（今井むつみ）

べてるの家で：ディスアビリティと映像人類学―イェール大学 Karen Nakamura 氏を迎えて― “CRAZY IN JAPAN: SCHIZOPHRENIA, TRAUMAS OF MEMORY AND COMMUNITY STORYTELLING IN RURAL JAPAN”（1月23日開催）

1月23日、研究セミナー「べてるの家で：ディスアビリティと映像人類学―イェール大学 Karen Nakamura 氏を迎えて―」“CRAZY IN JAPAN: SCHIZOPHRENIA, TRAUMAS OF MEMORY AND COMMUNITY STORYTELLING IN RURAL JAPAN” を東館4階セミナー室で開催した（医学史学会と共催）。日本の障害者運動に関する同氏の論文が Oxford 大学出版社創立100周年記念＜読むべき論文100本＞の一つに選ばれている点、身体障害や精神障害者集団へのフィールドワークを映像人類学的接近からもおこなう点など、気鋭の若手人類学者としての同氏の障害学研究が注目されたが、北中淳子氏企画・司会 による当日の研究セミナーは、45名あまりの聴衆を集め、一部廊下にはみ出すほどの盛況を呈した。1983年に発足した北海道浦河のべてるの家は、統合失調症等の精神障害を経験した当事者たちが日高昆布の袋詰めなどの経済活動をしつつ、相互にかかわりあう仲間集団を発達させたもので、今日では見学者やマスコミが訪れる一種著名な巡礼場所となっている。7ヶ月あまりの現地参与観察調査と映像人類学的資料作成をおこなった Nakamura 氏は、ご自身がインドネシア生まれ豪州育ち日系アメリカ人というような複雑なアイデンティティをもった正当派文化社会人類学を標榜する若手学者らしく、独特の着眼点とユーモアの感覚が光る論点提示をおこなった。指定討論者鈴木晃仁氏（慶應義塾大学・医学史）は島崎藤村『夜明け前』をひきつつ、精神錯乱の時代的変遷に関連した諸点を指摘、私は、妄想内容を集団で共有し社会的記憶に変容させる過程に、アイヌのイム遊びに通底する狂気遊びの感性が関わっている点と映像人類学的問題点等を指摘した。聴覚障害の方の参加者への対応に日英同時タイプの画面表示を用意するなど通常以上の準備を経て開催したが、活発な討論もふくめ、きわめてインパクトのあるセミナーとなった。　（宮坂敬造）